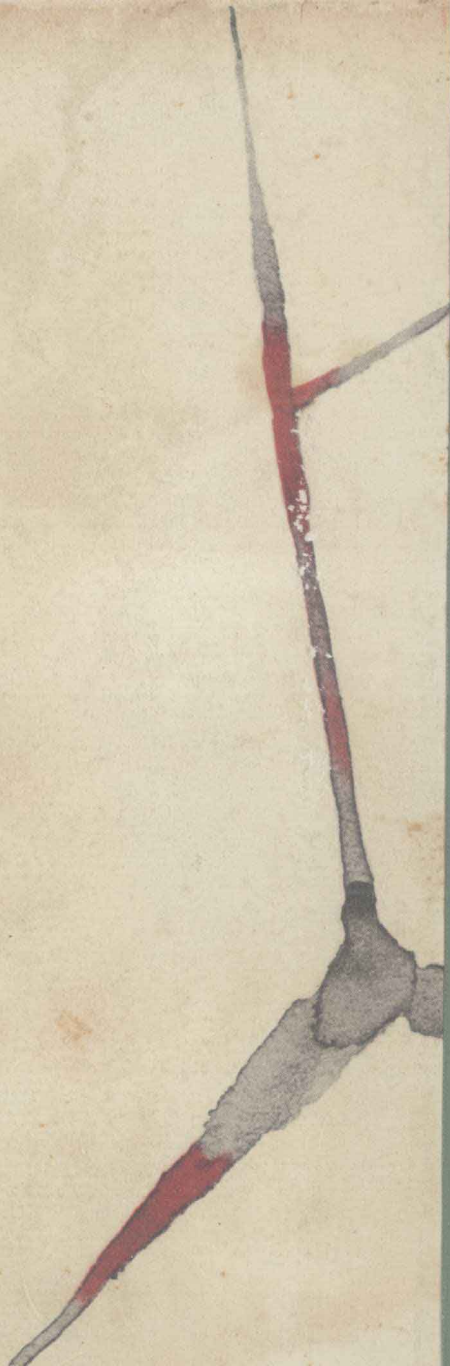


戦国一切経

上卷



戔国一切経

上卷

村上元三

中央公論社

戦国一切経 上巻 © 1964 検印廃止 定価450円
昭和39年7月10日初版印刷 昭和39年7月15日初版発行
著者 村上元三 発行者 宮本信太郎 印刷者 草刈親雄

発行所 中央公論社

東京・京橋2-1 振替・東京34

戦国一切経
上卷
目次

首のない大佛

日光月光

若菜わかなの沢

筒井つつい井戸

葵あおいと桐きり

石の声

女人にょにんれんげ蓮華

淀川よどがわ夜舟

高台寺まきえ時絵

五条の宿

セ

六

六

四

吾

谷

八

七

十

三

鬼山伏

野の分わき

駿府往來すんぶ

雨だれ剣法

冬の陣以前

イスパニヤ鉄砲

堺さかい燃ゆ

博勞ばくろうヶ淵ふち

戦場算盤せんばん

笹の丸御殿

二九

一四四

一五五

一七〇

一八六

二〇二

二三

二四三

二五六

二七六

地獄極楽

二六

初東風

二九

呪縛の茶

三六

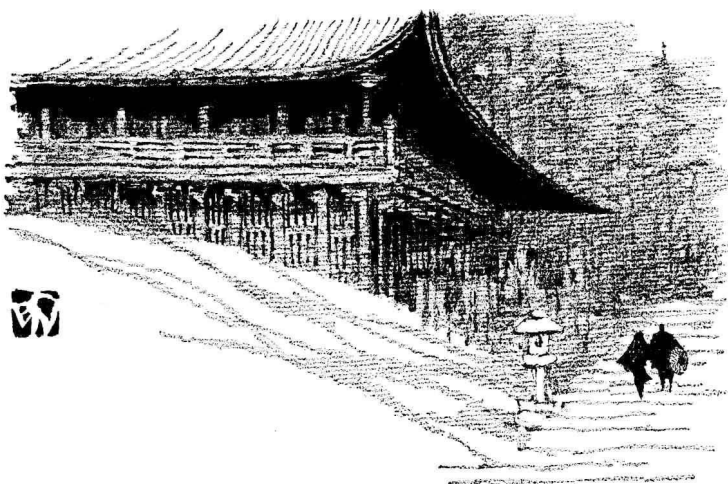
火の船

三三

装幀・挿画 岩田専太郎

戦国一切経

上卷



首のない大佛

この若い旅姿の浪人は、さっきからぶつと口の中で何か文句を言っているかと思うと、焼けた石畳の上に腰をおろし、ぼんやりと放心した眼つきで空を仰いだり、またそこらを歩き廻ったりして、もうだいぶ長い時間が経っている。

さっきは頭上にあつた春の陽が斜めになり、巨大な黒い影がのしかかってきて、すっぱりと浪人の影を包み込んでしまった。

この浪人は、さっき勢いよく大佛殿の焼跡へ走りこんでくると、次第に足の速度がゆるやかになり、まるで物の怪でも見るような眼つきをして、ぼんやりと石段をあがり、ここに突っ立ってからあと、そうやって時を過しているのがあつた。

ここというのは、南都東大寺の大佛殿焼跡で、五丈三尺五寸といわれる大佛が眼の前にそそり立っているが、そのびるしやな佛は頭部を失い、なんとも奇妙な形になっている。

この年から四十七年前の永祿十年、松永弾正久秀と細川

家の三好三人衆とのあいだに起った戦争で南都東大寺もおびたらしい損害を受け、松永久秀は十月十日、五千余の兵を用いて大佛殿へ夜討ちをかけた。

大佛殿をはじめ多くの堂塔は灰になり、大佛の頭部も猛火の中で焼け落ちてしまったが、その後、東大寺も没落の途をたどり、いまだに大佛殿は再興されていない。

わずかに奈良奉行たちの努力で頭部を失った大佛殿の周囲から廻廊にかけ、粗末な仮の板羽目で覆いがしてあるが、高さ百五十六尺といわれた元の大佛殿と同じ大きな仮殿を建立するわけには行かず、ようやく巨大な尊像の腰のあたりを板羽目で覆っているに過ぎない。

だから、この浪人の立っているところから、頭のない大佛が、ちょうど目の上に丸見えになるわけであった。

ところで、この浪人というところ、こういう慶長の世の中のどこにでも見られる主家を失った貧しい浪人の姿ではなく、廃墟にひとしい東大寺のこういふところに立っているにしては、ちょっと場違いなほど派手な身なりであった。

年は二十三か四であろう。顔は陽に灼けているが、鼻が高く、くりっと眼が大きくて、形のいい眉、きりっとしまった口のあたりなど美事な男ぶりで、月代さきぐしを立てているが、それもちゃんと手入れがしてあり、後れ毛一つ垂らしていない。

華やかな模様の小袖に、きらきら光る織物の袴、薄い水

色の袖無羽織、大小も立派な作りだが、供は連れていないらしい。

「はてさて、子供のころから夢にまで見ていた奈良の大佛とは、これか」

さもさも腹が立って耐らぬ、という風に、また若い浪人はひとり言をいった。

「今まで誰も、奈良の大佛の頭が無くなっているなどと、おれに教えてくれた者はおらぬ。長者どのと言われる島の老人たちも、そうだ。物を知っているように見せかけながら、あの連中、ろくに物を知らなかったわけだな」

浪人のひとり言が、少しづつ大きくなっていった。

しゃがんだり、立ったり、歩き廻ったりしながら、浪人はひとりで腹を立てているようだが、それでいてこの大佛殿の焼跡から立ち去ろうとする気配はない。

おそらく、初めて奈良へ足を踏み入れたのであろうが、そうやって腹を立てていながら、絶えず頭のない大佛を見あげているのは、やはりその妙な形をした大佛に興味があるからだと見える。

だいぶ春の陽ざしが翳かげってきたが、浪人は一向に大佛へ背を向ける様子もない。

この浪人にとって、なぜ大佛が頭部を失ってしまったのか、この荒れ果てた大佛殿から廻廊、中門へかけての無惨な焼跡は、だれが火をかけたのか、そういうことを考える

のは二の次らしい。

ともかく、自分が夢にまで見ていた奈良の大佛が、頭のない、こんな妙な形になって、風にさらされ、陽に照りつけられ、雨叩きになっている、というのが、どうにも腹が立つてならないようであった。

この浪人も、長いこと大佛殿の焼跡に立ったり、しゃがんだりしているが、もう一人、石段の下ところに、まるでぼろ屑を置いたような形で、一人の雲水の僧が足を投げ出し、古い焼けた石にもたれて、居眠りをしていた。

汚れたあじろ笠を胸に抱き、墨染の衣もぼろぼろになって、春の陽を上から浴びたまま、少しもまぶしそうな顔もせず、のんびりと寝息を立てている。

まだ三十前後だろう、頭の毛も少し延び、顔の下半分を薄汚い無精髭が覆っていた。

「頭のない大佛など、少しも有難味がないではないか」

全身の銅の色が、炎に焼かれ、四十七年という長い歲月、雨風にさらされたためであらう、赤茶けた色になっている大佛を見あげながら、また浪人はひとり言をいった。

こんどはういぶん大きな声だったので、足許の石段の下に睡っていた雲水の僧は、ぎょろりと眼をあげ、いきなり叱りつけるように声をかけた。

「幅九尺もある大佛のおん顔が、この末法の世に、そう容易に出来ると思っているのか。京の方廣寺の大佛殿は建立

されたが、この奈良は忘れられた都だからな。さっきからひとりでも何を文句を申しているのだ、田舎侍め」

睡っているところを邪魔されたせいか、ひどく機嫌の悪い声であった。

「誰だ」

いきなり足許から声が聞えたので、浪人は足を引き、石段の下を見おろした。

「おのれか、いま声をかけたのは。何者だ」

「坊主である」

「何だと」

「見る通り、坊主である。それともそなた、眼が悪いか。気の毒に、その若さで」

「ずけずけと悪態を叩きながら、雲水の僧は起きあがった。

身の丈は六尺を越しているであらう。やせているので、ひょろりと杉の木が突っ立ったような感じであった。

「あいさつもなしに無礼だぞ」

「気が短い性分とみえ、浪人は眼を怒らせ、雲水を睨みつけた。

「どこの坊主だ。名乗れ」

「雪川と申す雲水でな。雪川とは雪の川と書く。そなたは」

「大部十介。介とは家に伝わる古い官名だ」

「どこのご浪人だな」

「小豆島」

「ふむ、のんびりした島の生れに、いかさまふさわしい。大佛様のおん顔がないのを見て、腹が立ったか。今を去ること四十数年の昔、松永弾正という馬鹿大名が火をかけ、東大寺を、いま見るような無惨な姿にしてしまった。仏罰眼のあたりに下って、弾正めは大和信貴山にて滅亡。したが、この東大寺を再建するだけの有徳人は世に現れず、いずれもおのれの頭の上の蠅を追うに精一ばいでな」
べらべらと一息にしゃべってから、雲水の雪川は、改めて大部十介という浪人の顔を見あげた。

「そなた、この奈良は初めてだな」

「島で暮しているころ、老人連中から話に聞いていたが、こんなになっていようとは思わなかった」

大部十介の声は、ちょっと舌足らずの感じで、甘ったるい調子がある。

それと比べると雲水の雪川のほうは一言一言、まるでなりつけるような高い調子なのは、諸国行脚を続けながら説法で声を鍛えたためであろう。

「小豆島などというおだやかなところから、いまにも豊臣、徳川の手切れ近いと噂をされるこの物騒な西国へ、なんと思うてやってきた。物好きだな」

「おれの望みなど、坊主には縁がない」

「そう申さずと話してくれ。というのは、そなた、なかなかによい人相をしている、と見てとったからだ」

「からかうな、坊主め」

十介は腹を立てそうになってから、ちらりと中門の焼跡のほうを見た。

異様な身なりをした男が五人ほど、春の陽を斜めに浴びて突っ立ち、じっと自分のほうを睨んでいる、と気がついたからであった。

ゆっくりと雪川は、十介の視線の先のほうを振り返ってから、眼を元へ戻した。無精髭にまみれたその雲水の顔に、笑いが浮んでいる。

「何やら、そなたに用のある人たちらしいな」

「心当りがなくてもないが」

にこりと十介も笑って、足許の石畳に置いてあった編笠をひろい取った。

「ゆうべ脅された通りなれば、おれは首を失うかも知れぬが」

つぶやいて十介は、首のない大佛の像を、改めて見あげた。

大佛殿が焼け落ちてから四十七年、その頭部を失ったまま、長らく風雨にさらされて在すびるしゃなの巨大な尊像は、双のおん腕もなえしほみ、なだらかな肩のあたりの線も崩れ、末法の世の有様をそのまま示現している、と思われるおん姿であった。

しかし、遠く聖武天皇の御世、佛国土をこの地上に実現

したいという目的から、おびただし費用と人力を投じて作られた大佛は、頭部を失っていても、大佛殿の形がなくなっている、やはり見る者を圧倒するその尊さは、さつきから大部十介をとらえて放さず、そこから立ち去り難い心地にさせている。

「あの連中、おれに用がありそうだ」

なんとなく十介は、ていねいに大佛へ向って一礼してから、石段をおりはじめた。

「おぬし、おれを田舎侍と申したが」

草が生い茂り、かろうじて石畳だった、とわかるだけの、こぼこの石の上を歩き出しながら、十介は雪川を睨みつけた。

「なまじな侍の作法など、おれにはどうでもよいことだ。

島に住んでいたころと同様、おれは自由自ままに振舞うてやる。その代り、ときには人から恨みを買うこともあろう。今がそうらしいが」

こんどはまっすぐ中門の焼跡のほうへ眼をそそぎ、十介は油断のない足どりで歩いた。

永祿十年の戦いで、この東大寺も中門堂の辰巳のあたりから火がつき、廻廊に移って、大佛殿へ炎が襲いかかったの、この慶長十九年のころは、中門や廻廊も全く形を失っている。

そういう歴史のあとを振返るよりも、今の十介にとって

は、中門のあったあたりの古い石畳に立っている五つの人影のほうが問題であった。

いづれも、投頭巾の下に眼ばかり出した布を垂らし、わらわに茶せんをいくつもさした竹をかついだ鉢たきとも言われる空也宗の行者の姿で、その十の眼が殺気を帯び、近づく十介をじっと見据えている。

その五人の白い姿のうしろに隠れるようにして、華やかな小袖をまとった十六か七の娘がひとり、十介を避けたいような、また話しかけたいような、どちらとも受けとれる眼つきをして、おどおどと小さくなっていた。

この東大寺の時代を経た焼跡へふりそそぐ春の残照の中に、白い空也念佛の姿が五つと、小袖をまとった娘の姿が一つ浮びあがって見えるのは、異様な対照であった。

近づいて行った十介は、空也僧のほうは眼中にない、といった表情で、笑いながら娘へ眼をそそいだ。

「於柳どの、そうであったな。本名は明しておくが、素姓は語れぬとそなた、昨夜おれへ申したな。東大寺へ参詣する、と覚えていておれを追うて来たのであろう。それにしても、そこに立っている五人が連れの者たちだとすると、邪魔だな。追い返せ。おぬしと二人きりで語り合いたい。昨夜と同じようにな」

いくらか舌たらずのような声で、ぬけぬけと十介は言った。少しも行者たちの存在を気にしておらず、ひどく自信

のある態度であつた。

於柳と呼ばれた娘は、進み出て何か答えようとした。それを空也念佛のひとりが、そつと手で制し、念を押した。

「この浪人に、違いござりませぬな。人たがいを致すと、いのちがなくなるのゆえ、氣の毒でござる」

言葉づかいはいいのだが、妙に凄いのを含んでいる。この一人はほかの行者たちよりも年長らしく、態度もおちついていて、顔をおつた布から見える眼はどろりと赤く濁つて、いやな感じがする。

返辭をしようとしてから於柳は、おびえたように黙りこみ、眼を伏せてしまった。下ぶくれの、色の白い、おっとりした顔立ちの娘であつた。

「そこな浪人」

今度は十介の顔へ眼を据えて、その空也念佛は、荒々しい声になった。わら苞を結びつけた竹をかついでいるのだが、全身がむき出しの刃物のような鋭い感じがする。

「お前などに用はない、どいていろ」

と、無造作に押しのけようとした十介の右手を、不意にその空也念佛は引つつかんで、逆にひねった。

「何をするのだ」

振り放そうとしたが、行者の力は強く、十介の腕が背中
のほうまでねじあげられた。

「おのれ」

左手でかかえていた編笠を振りあげ、叩きつけようとした十介の身体へ、あとの四人の空也念佛が一せいにおどりがかつてきた。

「おやめ、南無右衛門。それではお前の話とは違ふ」

於柳という娘は甲高い声をあげ、引きとめようとしたが、それへは耳をかさず、南無右衛門と呼ばれた年長者の行者は、おそろしい力で十介を石畳の上に押えつけている。

こんなことには慣れているのであろう、ほかの四人の行者はあざやかに動いて、十介の腰から両刀を鞘のまま抜き取ってしまった。

「この行者どもは、於柳、そなたの味方か。これは企んだことなのだな。卑怯だぞ」

石畳に顔をすりつけられながら、十介はわめき立てた。

しかし於柳は、十介を助けようとしたものの、南無右衛門と呼ばれた年かさの空也念佛にはばまれ、近づけないでいる。

「おのれ、おれを誰だと思ふ。小豆島にての名門、亡き豊太閤殿下よりお墨付を頂いた大家家のひとり息子だぞ。肥後の加藤家より格別の庇護を受けるこの大部十介へ無礼を働いて、おのれたち、後悔すな」

十介の声が聞えないもののように、てきばぎと四人の空也僧は動き、十介の両手首をうしろで縛りあげ、ばたばたと動く足も押えつけた。

いくら参詣人の少い東大寺の焼跡でも、境内を掃除している寺僧もいるし、足場を修復中の大工の姿も見えるが、この空也念佛の行者たちの姿を眼にすると、怖いものをおそれるように、近づいて来ようとしてもしない。

大佛の下の方のところに立っていたさっきの雪川という雲水の僧は、面白そうにこれを眺めていたが、だんだん十介の声が高くなるので、見かねたのであろう、ゆっくりと近づいてきた。

「いかに東大寺の焼跡だとて、それでは理不尽すぎるようだな。どうしたわけだ」

薄汚れた行脚僧の姿を見ると、じろりと南無右衛門は冷たい眼を向けた。

「控えておいでなされ、旅の御坊」

「手ごめにされているこの若い浪人に、何か罪があるのかな」

「あるとも。聞きたいか」

南無右衛門は、びいんと雪川の腹の底まで響くような声で、

「この若い浪人は昨夜、われらのお頭の娘御に、いたづらを仕かけた。だから、これより仕置をしてくれる。他人は口出し一切無用のこと」

「はほう、お頭とは何びとやら知らぬが、あれに見える東大寺の僧や大工たちもおそれている様子を見ると、おぬし

たちはただの空也僧ではないようだな」

「口出し無用、と申したはずだぞ」

その問答を、はね起きようと暴れていた十介も、耳に入れた。

「なんだと」

両足を揃えて縛ろうとするのを、そうはさせまいとしながら、十介は於柳を見あげた。

「そなた、この土地の細工師の娘、と申したはずだぞ。おれを嫌いではない、と言った言葉、忘れたのか。こんなことをするのは、仕返しのためか。仕置とは、なんのことか。お頭などと、そなたの父親は何者なのだ」

その言葉へ背を向け、於柳は逃げ出そうとしたが、思い返したように足をとめ、十介を見おろした。その眼に、怒りの色がある。

「嘘つきめ」

いきなり於柳は、はげしい声を十介に浴びせかけた。さっきまでのおどおどした様子は、どこかへ消えている。十介を見おろした眼が、大きくなって、つばでも吐きかけたような表情であった。

「そなた、わたしと一緒に大坂へ逃げよう、と言うた。だから、あの旅籠で待っていたのではないか。そのわたしを置き去りにしたまま、そなた、こんな東大寺の焼跡へ首のない大佛様を拝みに参ったのか」

男のように太い声だが、怒りが手伝っているためか、於柳は続けさまに早口でしゃべった。まだ世の中を知らない小娘のように見えながら、ふだん大男たちを顎で使い慣れているように思える。

「おかげで、わたしはこの南無右衛門たちに見つかり、恥をかいた。父のところへ連れ戻され、一族の名を汚したと言われて、この大和の国から追い払われるかも知れぬ。みんな、そなたのせいじゃ。大そう武芸に長じている、などと思わせながら、見るがよい、この有様を。笑ってやる氣も起きぬ。みじめなことよのう」

息もつかずに於柳がしゃべり続けるのを、空也宗の行者たちに押えつけられながら大部十介は、ぼんやりと聞いていた。

もう両刀とも取りあげられてしまっているし、手足も縛られ、身動きもつかないで、十介はあきらめたように、石畳の上にあお向けになっている。

少し離れたところから、あの雲水の僧の雪川がのぞいているのも忘れたように、十介は於柳を見あげているうち、のん気な表情に戻って、にやにやと笑いはじめた。

「そなた、そのように氣の強い女子おんなであったとは、これは思いもよらなんだな。そうと知っておったら、口から放題のことを言うのではなかった」

「こやつが」

南無右衛門という年かきの空也念佛が、十介の襟をつかんで引き起した。

「参れ。お頭のところへ連れて行く」

「このような無礼を働いて、おのれたち、そのままでは済まぬ、と承知であらうな」

四人の肩にかつがれ、南大門のほうへ運ばれながら十介は、わめき立てた。

「奈良奉行の役人たちに見とがめられたら、おのれたち、手がうしろへまわるぞ」

それを冷い眼で見ながら、於柳も一緒に歩いて行った。あの南無右衛門という行者が、十介の大小と編笠を抱え、先頭を進んでいる。

中門のところに立って見送っていた雪川のほうへ、空也宗の行者のひとりが引返してきた。

「雲水の御坊、あの法螺吹きと知り合いか」

「大佛様の前で話をまじえただけのこと」

「なんの話をしていたな」

「あの若い浪人が、憎めない男のように見えた。よい人相をしておったが、小豆島の名門の生れらしいの」

「素姓など、どうでもよい。あの浪人を助けようなどとしても無駄。念のため、申し伝えておく」

そのまま引返そうとする空也念佛へ、雪川は声をかけた。「おぬしたち、お頭がどうのこうのと申していたが、それ